



## 「風と雲のことば辞典

(講談社学術文庫)」

倉嶋 厚 監修,

岡田憲治・原田 稔・宇田川真人 著

講談社, 2016年10月

370頁, 1,170円 (税別)

ISBN 978-4-06-292391-0

「天気」63巻12号(2016年)の新刊図書案内で本書が紹介されているのを見て、迷うことなく購入した。筆頭著者の岡田憲治さん(気象庁)には、土壌雨量指数(岡田ほか 2001)について普段からアドバイスをいただいております、それが縁で本学に御出講いただいたこともある(巻末の著者紹介参照)。ここでは、本書の概要について紹介し、評者の感想を述べたいと思う。

本書は、2014年に刊行された『雨のことば辞典』(倉嶋・原田 2014)の姉妹編にあたる。監修者序言によれば、「雨の次は、風と雲のことばを主題にしたい」という編集部の提案によって、本書は誕生した。言うまでもなく、私たちの日常生活には、「雨」と同様に「風と雲」が密接に関わっている。それは「台風」、「竜巻」、「雷雨」、「突風」といった災害だけでなく、農業や漁業、航海や旅行、詩歌や芸術などにも関与している。本書には、「風」にまつわることは1,040語と、「雲」にまつわることは611語が収録されている。巻末には「風と雲の天気ことわざ」も収められている。

『風と雲のことば辞典』なので、これらのことばが五十音順に配列されているのだが、単なる用語解説だけでなく、万葉集や古今集などに出てくる和歌が引用されている場合が多い。また、そのことばが、春夏秋冬どの季節の季語なのかについても言及されている場合が多い。評者は、岡田さん以外の著者を存じ上げないが、こういった分野が御専門なのだろうと推察する。何しろ、あとがきの後に、「季語索引・風と雲の四季ごよみ」まで配置されているほどの力入れようである。この「季語」に関して印象に残ったのは、「乾風」という用語である。「かんふう」と読めば、真夏に吹く乾いた熱風で夏の季語、「からかぜ」と読めば、乾燥した冬の北西の季節風で冬の季語、というのは同じ漢字なのに両極端で面白いと思った。

辞典ではあるものの、本書ではところどころにコラムが出てくる。これらは岡田さんが書かれたとのこと

であり、「天気」の読者向けの理料的な内容が多い。これに関して、コラム「最先端の気象用語④ 特別警報」では、あえて「土壌雨量指数」という用語を出さず、「(特別警報は)雨の場合は50年に1度に相当する大雨が降った場合、あるいは地盤のゆるみが50年に1度に相当する場合に発表される。」という記述がなされている(カッコは評者による。以下同様)。「土壌雨量指数」という用語を出すと、その説明だけで別のコラムが書けてしまうほどであるため、一般向けのコラムとして表現に苦労されたことがうかがえる。また、コラム「竜巻と突風」では、「(竜巻注意情報は)雷注意報を補足する情報であり、1時間という有効時間を持った情報なのが特徴。」と書かれており、評者は初めて竜巻注意情報の存在を知った。それにしても、竜巻の発生を予測するのは至難の技であろう。

『風と雲のことば辞典』だけあって、本書では吉野正敏先生(筑波大学名誉教授)の話がよく出てくる。そこで、今でも転載許可の依頼が来るという「日本の局地風の分布図」(Yoshino 1975のFig. 5.47)に出てくる風の名称が、本書でいくつ取り上げられているか数えてみた。「日本の局地風の分布図」では28の風が取り上げられており、本書でも「局地風」の項目ではこれらの多くが紹介されている。しかしながら、28の局地風のうち、独立した項目として取り上げられていたのはこのうちの10だけであった。「日本の局地風の分布図」のなかで中部地方に吹く「だし」、「あらし」を、一般的な用語でなく局地風の名称とみなすかどうかは微妙なところであるが、これらを加えても過半数に満たないのは意外であった。岡田さん、本書の改訂版を出す時には、ぜひ阿蘇山の西麓で吹く局地風「まつぼり風」も項目に加えて下さいね。

それはともかく、本書読了後、姉妹書である『雨のことば辞典』(倉嶋, 原田 2014)も読みたくなったことである。

### 参考文献

- 倉嶋 厚, 原田 稔 編著, 2014: 雨のことば辞典. 講談社学術文庫, 272pp.  
 岡田憲治, 牧原康隆, 新保明彦, 永田和彦, 国次雅司, 斉藤 清, 2001: 土壌雨量指数. 天気, 48, 349-356.  
 Yoshino, M. M., 1975: Climate in a Small Area: An Introduction to Local Meteorology. University of Tokyo Press, 549pp.

(首都大学東京 松山 洋)